

地域経済統合と構造変化についての研究  
-東南アジアモデルとその南部アフリカ地域に対する  
意義-

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ラミアリソン, ヘリー マホリソア メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20239">http://hdl.handle.net/10291/20239</a>

2019年1月20日

## 「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 商学部 専任教授

氏名 小林 尚 朗 ⑩

(副査) 商学部 専任教授

氏名 塩 澤 恵 理 ⑩

(副査) 商学部 専任准教授

氏名 所 康 弘 ⑩

- 1 論文提出者 ラミアリソン ヘリー マホリソア
- 2 論文題名 A STUDY ON REGIONAL ECONOMIC INTEGRATION AND STRUCTURAL TRANSFORMATION: THE SOUTHEAST ASIAN MODEL AND ITS IMPLICATIONS FOR THE SOUTHERN AFRICAN REGION
- (邦文題) 地域経済統合と構造変化についての研究：  
東南アジアモデルとその南部アフリカ地域に対する意義
- 3 論文の構成
- INTRODUCTION (序論)
- A. The Longstanding Developmental and Industrialization Failures in the Developing World: The Sub-Saharan African Exclusion and the Southeast Asian Exception (開発途上世界における長期にわたる開発と工業化の失敗：サブサハラ・アフリカの排除と東南アジアの例外)
  - B. Structural Change and South-South Integration (構造変化と南南統合)
  - C. Research Approach (研究方法)
  - D. Structure and Organization of the Thesis (本論文の構成)
- Part 1. POLITICAL ECONOMY OF REGIONALISM IN THE 21ST CENTURY: REVIVAL OF SOUTH-SOUTH REGIONAL INTEGRATION AND THE LIMITS OF GLOBALIZATION (21世紀の地域主義における政治経済論：南南地域統合の再興とグローバリゼーションの限界)
- Chapter 1- Literature Review: On the Trade and Economic Development Relationship and the Case

for Regionalism (文献レビュー：貿易と経済開発との関係および地域経済統合の事例)

1-1. The Dominant Neoclassical View and its Free Trade Arguments

(支配的な新古典派の見方と新古典派的な自由貿易協定)

1-2. Economic Globalization a Policy Induced and Biased Phenomenon? Evidence from the

Heterodox Literature (政策によって歪められた現象としての経済のグローバリゼーション：異端研究からの証拠)

1-3. Unorthodox East Asian Development Model: The World Bank's "East Asian Miracle"

Report (非正統派の東アジア開発モデル：世界銀行の『東アジアの奇跡』)

1-4. Rush to Regionalism: An Alternative to Globalization?

(急増する地域主義：グローバリゼーションを代替するのか?)

Chapter 2- Core Conceptual Framework: Developmental Regionalism and the Southeast Asian

Model (中核的な概念上の枠組み：開発指向型地域主義と東南アジアモデル)

2-1. History and Concepts of Economic Integration (経済統合の歴史と概念)

2-2. Traditional theory of Economic Integration: A Static Analysis

(経済統合の伝統的理論：静学的分析)

2-3. New Regionalism: Dynamic Perspective on Economic Integration

(新地域主義：経済統合の動的な観点)

Chapter 3- Discussing North-South and South-South Integration and Economic Development in the

21st Century: The Southeast Asian Model Compared with the Southern African

Development Community (21世紀における南北および南南統合と経済開発：南部アフリカ開発共同体と比較した東南アジアモデル)

3-1. Introduction (はじめに)

3-2. Analytical Framework: Theories of New Regionalism and the Concept of

Developmental Regionalism

(分析上の枠組み：新地域主義の理論と開発指向型地域主義の概念)

3-3. Preliminary Study on the Keys and Obstacles to a Growth Enhancing Regionalism –

ASEAN as a Benchmark (成長促進型地域主義への鍵と障害に関する予備的考察：ベンチマークとしてのASEAN)

3-4. Inefficiencies and Stagnation of Regional Integration and Cooperation in Southern

Africa- The Case of the Southern African Development Community (SADC)

(南部アフリカにおける地域統合・地域協力の非効率性と停滞：南部アフリカ開発共同体の事例)

3-5. Determinants of South-eastern Asia's Economic Growth and the Role of ASEAN:

Trends and Patterns

(東南アジアの経済成長の決定要因とASEANの役割：傾向とパターン)

3-6. Concluding Remarks (おわりに)

Chapter 4- Institutional Capacity and Regional Development Gap in the Southern African

Development Community: An Institutional Economics Approach (南部アフリカ開発

共同体における制度的能力と地域開発ギャップ：制度派経済学のアプローチ)

4-1. Introduction (はじめに)

4-2. Theoretical Review of the Link Between Institution and Economic Performance

(制度と経済パフォーマンスとの関係について理論的レビュー)

4-3. Institutional Heterogeneity and Development Gaps Within the SADC: From an

Historical and Institutional Economics Perspective (SADC 内部における制度的異質性と開発ギャップ：歴史のおよび制度派経済学の観点から)

4-4. Rethinking the Regional Cooperation and Institutional Reforms in the SADC:

Addressing the Development Gap and Institutional Fragmentation

(SADC における地域協力と制度改革の再考：開発ギャップと制度的フラグメンテーションへの取り組み)

4-5. Concluding Remarks (おわりに)

## Part. 2. EMPIRICAL ANALYSIS: DETERMINANTS OF RAPID STRUCTURAL

TRANSFORMATION OF THE ASEAN ECONOMIES AND THE POLICY IMPLICATIONS

FOR THE SOUTHERN AFRICAN REGIONALISM (実証分析：ASEAN 経済の急速な構造変化の決定要因と南部アフリカ地域主義に対する政策的含意)

### Chapter 5- The ASEAN Model of Development-Oriented Regionalism: Benchmark for

Industrialization and Structural Change in the Developing World (開発指向型地域主義の ASEAN モデル：開発途上世界における工業化と構造変化のベンチマーク)

5-1. Introduction (はじめに)

5-2. The Association of the Southeast Asian Nations: From Political to Developmental

Aspirations (東南アジア諸国連合：政治的から開発への熱望の転換)

5-3. Understanding the ASEAN Model through a Non-Traditional and Dynamic

Perspective (非伝統的および動的な観点を通じた ASEAN モデルの理解)

5-4. Features and Characteristics of the ASEAN Model (ASEAN モデルの特徴)

5-5. Concluding Remarks (おわりに)

### Chapter 6- Rapid Economic Growth in Southeast Asia: Empirical Analysis on Regional Integration and Structural Transformation in the Original ASEAN MEMBERS

(東南アジアの急速な経済成長：ASEAN 創設メンバー国における地域統合と構造変化に関する実証分析)

6-1. Introduction (はじめに)

6-2. Theoretical Framework and Methodology: Regionalism and Structural Transformation

(理論的枠組みと方法論：地域主義と構造変化)

6-3. Evidence of Growth-Sustaining Structural Transformation: Empirical Analysis

(成長持続型構造変化の証拠：実証分析)

6-4. Relationship Between Regional Integration and Structural Transformation in the

ASEAN: An Ex-Post Analysis

(ASEAN における地域統合と構造変化の関係：事後分析)

6-5. Concluding Remarks (おわりに)

Chapter 7- Export Products Sophistication and Preferential Trade in the SADC: Lessons from ASEAN Developmental Regionalism (SADC における輸出製品の高度化と特惠貿易：ASEAN の開発指向型地域主義からの教訓)

7-1. Introduction (はじめに)

7-2. Defining the ASEAN Model: Developmental Regionalism and South-South Economic Integration (ASEAN モデルの定義づけ：開発指向型地域主義と南南経済統合)

7-3. Implication of the ASEAN Model for Long-term Growth of the SADC Regions (SADC 地域の長期的な成長に対する ASEAN モデルの含意)

7-4. Concluding Remarks (おわりに)

Chapter 8- Policy Recommendations and Long-Term Prospects for the SADC Regionalism (SADC の地域主義に対する政策提言と長期展望)

8-1. Introduction (はじめに)

8-2. Policy Recommendations Derived from the ASEAN Developmental Regionalism Model (ASEAN 開発指向型地域主義モデルから引き出される政策提言)

8-3. Addressing Issues Specific to the SADC Regional Bloc (SADC 地域ブロックに特有な問題への対処)

8-4. Concluding Remarks (おわりに)

CONCLUSIONS (結論)

A. Research Findings (研究成果)

B. Policy Implications (政策提言)

C. Limitations and Further Research (今後の課題)

#### 4 論文の概要

本論文は、自由貿易協定に代表される地域経済統合が開発途上経済の経済構造や経済開発に与える影響を検証したものである。低開発の状態にある経済、とくにサブサハラ・アフリカ地域の経済は、これまで工業化を通じた経済構造変化が不足しているのに対して、東南アジア諸国連合 (ASEAN) の地域ネットワークの形成に基づく開発モデルは、開発途上世界の経済構造変化にとって代替的な戦略になり得るとする仮設のもと、実施されてきた研究の成果である。最大の目的は、ASEAN モデルが主流派の開発モデルや地域統合モデルの限界を克服し、開発途上経済においてどのように経済構造変化を達成するのか代替案を提示することである。本論文は、序論と本論、および結論から成り、本論は、おもにポリティカル・エコノミーの観点からアプローチする第 1 部 (Part.1) と、実証分析を中心とする第 2 部 (Part.2) とで構成されている。

INTRODUCTION (序論) では、第二次世界大戦後における南の開発の歴史を概観するとともに、経済開発における経済構造変化について、その重要性と経済発展に結びつく特質などを指摘したうえで、本論文における研究方法や構成が示されている。第 1 部では、文献レビューや理論的考察を通じて、なぜ主流派の経済学が多くの地域、とりわけサブサハラ・アフリカ地域の低開発や低所得国の罨に対処することに失敗してきたのか、グローバルな経済システムを形成してきた基礎的な貿易と開発の関係を念頭に置きながら展開されている。南部アフリカ地域

の経済協力体である南部アフリカ開発共同体 (SADC) と ASEAN の開発パターンの相違の証拠を示すために、地域経済パフォーマンスに関するデータが分析されている。第 2 部では実証分析が行われ、おもに SADC および ASEAN における構造変化と地域統合との関係について分析されている。本論文の特質の 1 つであるが、さまざまな経済変数間の相互作用とそれらが地域の成長と貿易パターンに与える影響を検証するためにマルチレベル分析が用いられている。そして最後に CONCLUSIONS (結論) では、結果の要約とそれに基づく政策提言が示されている。

Chapter 1 (第 1 章) では、貿易と経済開発との関係に関する先行研究レビューが行われている。伝統的な比較優位論から新貿易論まで当該領域における研究の変遷を概観し、また、正統派に対する非主流派の代表的な文献や、「市場対国家」論争を引き起こした世界銀行の『東アジアの奇跡』についての詳細なレビュー、それらの議論から波及する地域経済統合への動きに関する先行研究レビューが行われている。

Chapter 2 (第 2 章) では、本論文の中核となる概念上の枠組み、すなわち開発指向型地域主義としての東南アジアモデルが示されている。経済開発に成功してきた ASEAN モデルが投資、貿易、製造業の地域化に基づく構造変化によって特徴づけられること、伝統的な地域統合論ではそのような ASEAN の成功のメカニズムを十分に捉えることができないこと、そのため伝統的な静学的アプローチではなく新地域主義のアプローチで分析することの必要性が指摘されている。

Chapter 3 (第 3 章) では、南北間の経済統合と南南間の経済統合との相違について議論されている。伝統的な南北間の貿易・経済関係が南側諸国の経済的従属性にほとんど変化をもたらさないのに対して、ASEAN のような南南間の地域スキームは開発途上世界における経済構造変化の障害を克服する可能性を持っており、具体的には経済の多様化、知識・技術の波及効果、製造業部門への投資などを通じた経済構造の変化に効果があること、それらが技術ギャップの小ささなどにより生じやすいことが示されている。そのため、開発途上国における長期的な工業化やグローバルな輸出競争力の構築にとって南南地域統合は最初のステップになり得ること、そして欧州モデルの SADC と比較して ASEAN がその好例となることが示されている。

Chapter 4 (第 4 章) では、サブサハラ・アフリカ諸国、とりわけ SADC 諸国が制度派経済学のアプローチで分析されている。取引費用と経路依存性の制度的概念は、この地域で処方されている主流派経済モデル (小さな政府と自由放任政策 = 市場重視の改革) が歴史のおよび外因的状况によって形作られた現存の略奪的且つ非効率な経済構造を改善するのではなく強化するだけに終わったことを説明しており、SADC 諸国がこの不都合な経路から抜け出す方法として経済構造変化と地域統合の重要性が議論されている。

Chapter 5 (第 5 章) では、本論文の前半部分でその関連性が示されてきた地域統合と経済構造変化に焦点が当てられ、実証研究の理論的および概念的な背景を設定するための比較分析が試みられている。ASEAN の設立からこれまでの歴史の変遷を概観したうえで、ASEAN と他の開発途上諸国による地域協定とを比較した記述統計学およびグラフ分析が行われている。これらの結果も、ASEAN モデルの特徴に関する前半部分での議論を補完するもので、次章から行われる実証分析における変数の選択を正当化していることが示されている。

Chapter 6 (第 6 章) では、最新のデータと計量経済学の手法を用いた実証分析が行われている。本論文では、成長分解モデルと貿易における重力モデルとを組み合わせることで、ASEAN

自由貿易地域（AFTA）形成後の成長加速期における ASEAN 諸国の経済構造変化の証拠を示すことが試みられている。すなわち、ASEAN 諸国の成長加速がいつどのようなタイミングで生じたのか、経済成長を促進した経済構造変化がどのように生じたのか、そしてそのような構造変化の過程で地域経済統合がどのように重要であったのか、以上のような 3 段階の実証分析によって、ASEAN における地域統合と構造転換の関係が明らかにされている。

Chapter 7（第 7 章）では、SADC 諸国が ASEAN と同様の経済変化と多様化を実現することを妨げている要因について検証されている。貿易結合度、特惠関税マージン、顕示的比較優位、および顕示的技術優位にリンクする革新的なパネルデータが構築され、経済の多様化と技術の向上に関する ASEAN と SADC との違いを説明するボトルネックを特定するための分析が行われている。そして SADC 諸国が ASEAN のような工業化と持続可能な成長を達成するための政策提言、とりわけ非関税障壁や市場の不完全性への対応や産業協力の必要性が指摘されている。

Chapter 8（第 8 章）では、実証分析の結果を簡潔に要約したうえで、それを解釈することによって、SADC 諸国や開発途上経済が経済構造変化を達成し、低所得国の罍から抜け出すための戦略に関するいくつかの政策提言が示されている。ASEAN モデルのもっとも重要な特徴として、これまで新自由主義的な経済政策や南北間の経済統合では達成できなかった経済構造変化や工業化についての潜在力を挙げ、ソフトで漸進的な南南間の地域主義が推奨されている。

CONCLUSIONS（結論）では、本論文の主要な成果を要約したうえで、その意義と限界についてまとめ、将来の研究の方向性が示されている。

## 5 論文の特質

本論文の第 1 の特質は、現実の世界で長期にわたり高成長を続けてきた東南アジア諸国に注目し、その経済政策環境を形成してきた地域協力組織である ASEAN について理論的、実証的に分析することを通じて、経済開発を目指す他の途上地域、とりわけ比較分析の対象であるサブサハラ・アフリカ諸国への政策的含意を示しているところである。近年では経済成長率というマクロ統計上は成功を収めている国もある SADC メンバーであるが、経済構造や経済の多様性、あるいは著しい所得格差などに大きな変化は見られず、低成長時代から変わらない天然資源に依存したその成長の持続可能性が疑われている。本論文では、学際的なアプローチを採ることによって、比較優位に基づく自由貿易論や地域経済統合論への過度なバイアスを回避し、域外国との交渉力を高めることも可能とする、各国の経済・社会状況に応じて政策的な自由度の幅を広くするための柔軟性のある地域経済協力の有効性が示されている。

第 2 の特質として、第 1 の特質とも関連するが、地域経済統合にはいくつかのタイプが存在し、途上国の経済開発にとって、経済構造変化を促すことでプラスに働く地域経済統合もあれば、逆に既存の経済構造を固定化することで開発にとって正の影響を生み出さない経済統合もあることを示したことが挙げられる。これは、自由化度の高い地域経済統合が必ずしも完成度も高い統合であるというような単純な図式にはつながらないことを示唆する本論文の有益な特質であり、開発途上地域における今日の新地域主義の波が、主流派の推進するグローバリゼーションの動きに抗する性格を有することも示唆している。

それと関連して第 3 の特質であるが、南南間の地域経済協力の有用性が示されていることを挙げることができる。本研究では、工業化を通じた経済構造変化が低所得国の罍から脱するた

めには決定的であることが示されたが、多くの開発途上国で実践されてきた市場ファンダメンタリズムが構造変化や経済の多様化をもたらしたわけではなかった。そして、ASEAN の経験から言えば、構造変化は途上諸国が輸出向けの工業生産ネットワークに基づいて協力関係を構築するほうが容易且つコストもかからないことを提示した。

そして第 4 の特質は、成長分解モデルと貿易における重力モデルを組み合わせることによって、ASEAN 諸国の成長加速が生じたタイミング、経済成長の促進に欠かせない経済構造変化の発生メカニズム、およびそれらに対する地域経済統合の貢献についての実証分析がなされ、ASEAN の地域統合と経済構造変化との関係が明らかにされていることである。

## 6 論文の評価

上記のような研究内容の大部分は、すでに大学院紀要や査読付き論文、あるいは関連学会において随時発表されてきたもので、これまで高い評価を受けてきた。学会における討論者およびフロアから受けた指摘については再考し、研究のさらなる改善に取り組んできたが、その成果が本論文である。また、論文提出者の故郷でもあるサブサハラ・アフリカ地域の低開発からの脱却に向けた政策提言は極めて実践的であり、理論・実証研究と現実の世界をつなごうとする試みも評価できる。各地で地域経済統合の動きが活発化するなかで、長期的な開発の成功例としての ASEAN の特質を理論的・実証的に捉え直し、それを一般に応用することは、「ワシントン・コンセンサス」以外の選択肢が制限されてきた現実の世界に対する問題提起でもあって、評価に値する。

とはいえ、問題あるいは課題も残されている。ASEAN について、確かに低所得国の罍からの脱却には学ぶ点が多いにせよ、モデルとされている ASEAN 諸国のなかには中所得国の罍に陥っていると指摘される国もある。また、ASEAN と SADC とを比較する場合、初期条件の違いについてさらに精緻に分析することが、実際の政策的含意を考察する際に必要になると思われる。実証分析についても、AFTA 効果の発生時期について、関税率の変化なども考慮したうえでさらに長期間で分析できれば、さらに説得力のある分析結果が得られたかもしれない。

以上を本論文の課題として挙げることができるが、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

## 7 論文の判定

本学位請求論文は、商学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（商学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上